

# 伊豆下田 料理 米斗 飲食良店 組合 事件簿

5

土佐屋・カクテル龍馬〈前編〉

岡崎大五

# 主な登場人物



焼家の大吉組合長



新米刑事・新庄 誠



むさしの真理子



美松の幹夫



一品香の慎ちゃん



賀楽太のかよちゃん



土佐屋のよっちゃん



なみなみのトンチャン



料磨のオサム

## 連載発行日 <毎月10日・25日更新・全11回>

- 2017.4.25 火 序章 「むさし・天城そば」
- 2017.5.10 水 第1話 「美松寿司・黒船寿司（前編）」
- 2017.5.25 木 第2話 「美松寿司・黒船寿司（後編）」
- 2017.6.10 土 第3話 「一品香・天然塩ラーメン」
- 2017.6.25 日 第4話 「賀楽太・おまかせ」
- 2017.7.10 月 第5話 「土佐屋・カクテル龍馬（前編）」
- 2017.7.25 火 第6話 「土佐屋・カクテル龍馬（後編）」
- 2017.8.10 木 第7話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（前編）」
- 2017.8.25 金 第8話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（後編）」
- 2017.9.10 日 第9話 「料磨・<sup>アジ</sup>鰯のなめろう丼（前編）」
- 2017.9.25 月 最終話 「料磨・<sup>アジ</sup>鰯のなめろう丼（後編）」

## 第五話 「土佐屋・カクテル龍馬（前編）」

真理子は、土屋早苗のところにオレオレ詐欺のことで話を聞きに行ってくれていた。

そんな彼女から何時に電話がかかってくるのか、わからなかった。新庄は非番でもゆっくりしていられなかった。昼過ぎには起きて、多々戸<sup>たたど</sup>浜に行き、美しい海を見ながら、コンビニで買ってきた弁当を食べた。

五月下旬ともなれば、Tシャツに短パンだけでも十分である。澄んだ空気は気持ちよく、ポカポカとした陽ざしを浴びていれば、日ごろのストレスなど溶けてなくなりそうだった。

海ではウエットスーツ姿のサーファーたちが、波と戯れている。

この多々戸浜があるのは、下田市街から二キロほど南の吉佐美地区きさみである。多々戸のほかにも、入田浜いりた、吉佐美大浜とサーフィンスポットがある。

警察官舎もこの地区にあつたので、警察官の中にも、下田署に赴任してからサーフィンを始める者もいた。一方、下田消防署では、各世代にサーファーがいるようで、消防職員は、管轄外への異動がほとんどないので、サーフィンがやれるからと下田消防署に入った職員も、多数勤務しているそうである。

下田には、この吉佐美地区のほかにも、北部の白浜地区がサーフィンスポットしては有名で、いずれの地区でも夏は海水浴場になるが、それ以外の季節は、サーファーたちの楽園だった。

官舎からは、吉佐美大浜のほうが多々戸浜に近かったが、新庄はもしやと思つて、多々戸浜に来た。

この前、病院で出合つたエミが、多々戸浜に行くと言つていたからである。

海にいる十人ほどのサーファーのうち、女性は二人。遠いので、はっきりとはわからなかったが、一人はエミのような感じであつた。

その女性がボードに腹ばいになって、両手を櫂かいのようにかきながら、波を目指して進んだ。やがて岸のほうを向く。波が背後から迫つてきていた。次の瞬間、エミはボードに立ち上がり、波の斜面を横に向かつてジグザグに、小気味よくターンを繰り返しながら行く。滑り終わると、ふたたびボードに腹ばいになり、沖で波を待つサーファーたちのほうに向かつた。

新庄は、彼女と一緒にならサーフィンをやってみたかった。見ているだけで爽快な気分になるのだから、実際にやったらさぞ楽しいにちがいないのだ。

次第にウトウトし始める。

体の中に太陽のエネルギーが吸収されるような心地よさだった。

「ワトソン君、ワトソン君……」

新庄は女性の声に目が覚めた。

目の前で、ウエットスーツの上半身を脱いで、水着姿でいるのはエミだった。

女神のように後光が差しているように見え、新庄はブルルと頭を振った。

「……なんか、携帯が鳴っていたけど」

「いえ、いいんです！」

着信は、案の定、真理子からだった。それよりも、せっかくのエミとの遭遇を大事にしたい。

「サーフィン、気持ちよさそうですね」

「もう、最高よ。東京から遠征で来た友人たちと入っていたの。天気もいいし、波もそこそこ。下田の海って、湘南や千葉とは段違いにきれいでしょ。沖縄でも本島以上、離島並みの美しさって言われているのよ。コンタクトしていても、海中で目を開けられるくらいなの。ボードに座って波待ちしていると、小魚がチュツチュって、脚にキスしてくるし」

新庄は一瞬、できれば小魚になりたいと思った。

「エミ、そろそろ帰るぞ！」

駐車場のほうから、大声で呼ぶ仲間の声がした。

「そうだ、ワトソン君。サーフィンを始めるのなら、一緒にやろうよ。ウエツトスーツやボードなら、誰かのお古を探してあげる。最初はそれでいいでしょう?」

「本当ですか? だったらぜひ、お願いします!」

「アイアイサー!」

右手で敬礼してみせる彼女は、キラキラしていた。可愛すぎて、新庄は言葉もなかった。

エミは手を振りながら、茶色がかった長い髪をなびかせて、白砂のビーチを走っていった。

「ヨッシャ!」





エミの姿が小さくなると、新庄は小さくガッツポーズした。

そして真理子に電話する。

「すみません、電話、もらったみたいで」

「まったく、何をやっているのよ、ワトソン君。よもやエミちゃん相手にデレデレと……」

この人は千里眼の持ち主なのかと新庄は一瞬、焦った。

「……している夢で見ながら、昼寝でもしていたんでしょう?」

多々戸浜に来ていることはばれてなかった。ホツとする。

真理子に知られたら、パラッチと異名をとる彼女のことである。下田中に吹聴されて、数日内には、誰もが知っていることになりそうなのだ。

「今すぐ来られる?」

新庄よりも、真理子のほうが焦っているようだった。

「私はこれから用事があるから、長居できないの。しかも早苗さんの件はちよつと変な話で、ここは本職のあなたに話を聞いてもらったほうがよさそうなのよ。ただ、早苗さんの気持ちには配慮してあげないと。もしオレオレ詐欺に遭っているのなら、一番傷つくのは早苗さん本人なんだもの。ワトソン君、前みたいにエラそうに、わかったようなことを言ったらダメよ」

それは以前、新庄が真理子に対して、高飛車な態度で捜査手法を話した時のことを指すのであろう。

警察は権力である。時に民間人を見下すことがあるのも事実だ。

エミと話せたおかげで、新庄はいつも以上にやさしい気持ちになっていた。

以前は真理子に迷捜査を反省してほしいと思ったが、今は自分自身が反省する時なのかもしれない。市民の協力なくしては、捜査も前には進まないのだ。三島警部補の教えでもあった。

新庄は真理子に言われた場所に、スクーターで急行した。

そこは下田港の目の前だった。地元では「河岸かしっぱた」と呼ばれるところで、漁船や遊漁船、クルーザーが数十艘停泊している。少し離れた岸壁に海上保安庁の巡視船もある。

アジやサンマが大きな台の上に干された、干物横丁の前で真理子は待っていた。

「こっちよ、こっち」と路地にいざなう。

二階建ての家が、土屋早苗の自宅であった。

「早苗さん、一人暮らしなの。全然元気なんだけど、お孫さんからの電話で、パニックになっちゃったみたい」

「お邪魔します！」

真理子に続いて、新庄は玄関から中に入った。

畳敷きの居間はきれいに掃除され、ちゃぶ台がある。液晶テレビでは午後のワイドショーが放映されていた。

「早苗おばちゃん、この人にもう一度、さっきの話してくれない？　大丈夫。誰にも言わないからさ。私の友達だから信用できる人なのよ。力になってくれるから」

「でも私は、騙されてなんかいないよ。ちよつと変だなと思っっているけどね。まだまだそんな歳じゃないもの。孫にも内緒にしてほしいと頼まれている

し。孫に大金をやったことを東京にいる息子と嫁に知られたら、どやされちやうわ。待ってよ。今、お茶をいれるから」

新庄は、早苗のペースを遮らないように注意した。いれてもらったお茶を飲み、出された煎餅をいただく。

早苗もお茶をすすった。

「それがね、お金の電話があつた、一週間くらい前かな。俺だよ、ばあちやんって、孫の保から突然電話があつたのね。携帯番号が変わったから、新しい番号を控えてくれって言うのよ。それがこの番号でさ」

早苗は立ち上がり、壁に面して設置してある黒電話の下の棚から、メモを持って来た。

メモには「保 080-4562-34XX」と書かれている。

「それから、仕事に失敗して、すぐに百万円を穴埋めしないとクビになっちゃうって、電話してきたの。午後には小田原に行くから、ばあちゃん、百万円持ってきてって」

「それで小田原まで行ったのですか？」

新庄がたずねた。

「うん、そうなのよ。えっちらほっちら電車を熱海で乗り換えてね。そして、駅では知らない人が待っていた。こりゃ怪しいと思ってね。その男に携帯電話を借りて、保に聞いた新しい番号に電話したのさ。すると保がこう言うの。前の仕事が長引いて、上司を待たせてあるんだと。あとで合流するから、上司に百万、渡してほしいと。それと、絶対に内緒だよって……」

早苗はいっきかせい一気呵成に話してお茶をすす啜った。

「どう？　ワトソン君？」

「この人、日本人みたいな顔して、外国人だったんかいの？」

早苗が不思議そうに新庄を見た。

「いえ、あだ名のようなものですよ」

新庄は早苗に笑いかけながら、深刻な気持ちになっていた。

最初に携帯番号が変わったと電話をかけて、二度目で詐欺を実行する手口は、すでに多数報告されている。さらに、都市部へおびき寄せて現金を詐取する詐欺を「上京型詐欺」と呼ぶ。

不安な気持ちで違う町へ向かう家族の心理を逆手にとって、距離と時間を使って相手を追い込み、「金を払ってあげないと」と、被害者に冷静




さを失わせるのだ。

「じゃあ、夜の九時に土佐屋に来てちょうだい。私の捜査のほうも手伝わってもらわないと」

真理子はそう言うと言つていった。

新庄は早苗の話を聞きながら、オレオレ詐欺に間違いないと確信を深めていった。(続く)

# 事件簿MAP

事件簿は  マークのお店でお求めいただけます。



この物語はフィクションですが、各店舗、店主、料理は実在します。ぜひ一度お越し下さい。



## 岡崎大五

### プロフィール

1962年愛知県生まれ。作家。  
2003年より下田市在住。下田市観光大使。ベストセラーの『添乗員騒動記』（角川文庫）をはじめ、下田を舞台にした『生還の海』（徳間文庫）、『サバーイ・サバーイ』（講談社）など著作は40冊以上。  
下田の人と自然をこよなく愛する、サーファーでもある。

連載「伊豆下田料理飲食店組合事件簿」はこちらでお求めいただけます。

スマホで読む  1話 **¥100**



下田 100 事件簿 

※アカウント登録・クレジット決済

冊子で読む  1話 **¥200**

#### 冊子版の設置場所

焼家／むさし／美松／料磨／一品香／土佐屋／開国厨房なみなみ・なかなか・ぼちぼち・ダイニングNAMINAMI／賀楽太／商工会議所／道の駅 まるごと下田館／村上書店本店・アネックス店・とうきゅう店／セブンイレブン下田柿崎店／地場や／ガーデンヴィラ白浜

#### 定期購読

ご連絡いただければ下田街中・東本郷・西本郷は配達も承ります。  
お問い合わせ／080-5297-6144（澤地） ※全10回（2,000円）分前払いとなります。

<協力店>

美松 / 料磨 / 一品香 / 開国厨房なみなみ / 土佐屋 / 賀楽太 / むさし / 焼家



伊豆下田100景  
shimoda100.com

200